



佛語古今抄

再撰貞亨  
三



5  
1864  
3





始として治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり  
治常所傳の各同するに事可なり

とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり  
とされし事とて揚起る事あり

東を云△再撰するに意の條△式のち

三十一





一と云ふに二年かゝるはまて用ひたれし土砂のまを  
 しまりしとて秋のありゆかりしはまらち物  
 あらゝりたる書可く田まのまことなるは秋  
 の二年ははれちし一すも様はる。押さるる格り  
 事なまも一まはりし山花は青の深花北  
 花を秋のかきよめられしはるゆりとも  
 けしもらりしまのめも引し一駢<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>決<sup>ハ</sup>て  
 事なれしゆりとりし秋の引しまや或は<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>野<sup>ハ</sup>  
 のおより同。白頬。白猫。福麟。胡<sup>ハ</sup>鷄<sup>ハ</sup>鴨<sup>ハ</sup>さう<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>  
 一向をあれしと新しきまてくまは秋のまよはれ

一と云ふ歸來のまよとていふはまらちのまを  
 ちとて一と云ふは。まらちのまは秋のまの  
 まらちのまはれし物<sup>ハ</sup>まらちのまは秋のまらち  
 まらちと<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>のまらちまらちのまらち<sup>ハ</sup>まらち  
 まらちのまらちのまらちのまらちのまらち  
 まらちのまらちのまらちのまらちのまらち  
 秋のまらちのまらちのまらちのまらち  
 雨とてまらちのまらちのまらちのまらち  
 今の例より秋のまらちのまらちのまらち  
 のまらちのまらちのまらちのまらちのまらち

百々抄卷三



ね和の二角ありて他諸よりよき各目あれは  
 一はれてとこまよし用一しとまよしと来葛草  
 とまよし節法の名まよとまよしあし来秋に柱物  
 の去様お身く音まよとこしつるよれかかん  
 一れつと来然のらねしよ一し変と鮎と尚おの  
 こまよし古抄のままよし勿論とて留まよし上下  
 のこまよとこしつる鮎まよしつるよれとつる  
 とつる諸のとつるてまよし秋のまよしあねと今此  
 古法よしつる時とこまよしはよまよしつるれとまよ  
 一用一しつるれとまよしあよしつるれとまよしつるれとまよ

のおまねとつるれとまよしあねと今此  
 差ふとまよしつるれとまよしあねと今此  
 秋よありはまよしとつるれとまよしあねと今此  
 のこまよし各目ありはまよしあねと今此  
 此用まよしや貴賢よとつるれとまよしあねと今此  
 此用まよし和よあまよしつるれとまよしあねと今此  
 よま多用あれはまよしあねと今此  
 一し向のまよしはれてまよしあねと今此  
 他諸の用ちらとまよしあねと今此  
 冬と室とれしとまよしあねと今此

和名抄

九







○ 年子とありし新とある物也事

むらり連証の式より序しすあの名とあるは  
おとそ一各とありし年子とらいつれ同きもの  
又向去ありよりされとそと此ら合よふと句  
の言とあり時と物月一い右よ今此能階の書秋を  
例のめ向去とよもな冬といきくご向去しよと  
て各月の種重と論とるに後自よとれり年子と  
ありて平向よとれり新とらるおありおとそ  
のち中に○まを皇の業と論ありてしよとらる

よお多ありし新とらるの事と文よりて新の業を  
なるとれよ一水等の業とそを合とるれと例の  
浮葉の類ちりともてとるるに水等ののおとら  
ゆよも川よも業ととられに水と行とらるしと業  
わらりし新とそ年子とも用とるむらりと古おの  
よも水等のとそを合とるなれと例ともて新  
よもとら右はうりし新也とそれの能事の野のといふ  
れおゆくとい新とらるしとやと自らとい例の偏  
ありし年と舊の業と新の業と終の業と新  
あれし年とありしととらるしと一はれと新と





さうよとありて連遊もさ名と使へるを此能遊  
しとて海と新の舞向とさほくの用なり  
四季の舞をさ曲節とて一〇今梅とて  
各所へ新の舞向とて一句よま所の名とせし  
その向舞の情とて一〇さるる昔季と終ん  
とていさ女情にかあつてあつてやうあるまし  
まを時のみなり

あさよらと能手ら一梅え片ん  
かくとて能されとての浦らの姿情をばさ  
その能れりもゆら一能一能のち武陵より

伊賀よゆら馬の若鞍くらがらて

かちあつてはつと坂とさ馬車哉  
け時とるはこれのく此能のさる女牛もある地  
とてさる女服もありてむらむら此の連鞍  
しはさるや此戯も能りてむらむら此の連鞍  
とてさるいよこれおあり此の連鞍よ次  
あつてはさるいなり

かくはさる角ゆらとげよ次  
けむら花子よらるる能解の両国とあつていよ  
源氏よさるいなり能とて能の能のこ

と扱てかくらもれぬ御年と書まはせしめて  
次へありて用よあつてこれと新撰のや  
つむ各取ひおし傳へるおまへしあま  
あつて及りて又あると老懐の詩毫も

年くや様もまらる様の面

け向らぬゆゑ迎年のことと様をく控ふる  
歳日の詞あつれいそと新撰のやつむ或は  
可ま格のやつむとれ新とのい新撰は  
い可ま格とい今の新撰よりてこれと今  
の能得の名目とつむとや

運ニ云け所のおほむねい白馬の類説し想あり  
て先師の遺稿もも教在たりてと也先師の人和  
り御り新ありて軍書より芳御のつ子  
向えし時の起りて難陳ありて所の詞も  
故翁を富士芳御の今對して新は一略の  
作ありてと貞室老人此そとくと芳御と  
はくとも各向ゆへとせとおそくはつむち助は  
ちつととも家の門人らととゆへとて此の翁自  
を序んら跡と解しまるれ是あんとて先師  
いけ新と扱されしと評し祖翁の詞と評せ





「せむらひのしきさるらう作の飛客あらんしむ世  
 二例の衆議ありて新辨の二格とあるり  
 ちるに寛永永の初比あらん湖南の新君山  
 今ありて七浦や二子の世と二子ははくとも  
 各所二新の何はあれとそれと新の味  
 かしくはて新辨も何とせしむと二時  
 こそ孝此服とほけて口を格とも二二  
 られとぬ為の減後よりりいひとぬ新製  
 あれは左驛と空りよりあらん定と一死此

寛永より今日の撰おとらさんとて尊の服  
 ころけりしけ辨もやあるとて也▲に授  
 ころに先師の没は二新もも子も定かく  
 せられたの議論もおねる中よ名もあは長良の  
 特川宮より口を子の特辨ともあはとてぬ  
 歸真ハ新の特辨ともあはとてぬ  
 うさしうも世の辨の子也 蓮二もかくら  
 ばれと角ひさしけは二新の特辨も新  
 飼字のまをともよ時とてかくるより新  
 よあつしかくらとてぬとてぬ

新のふゝ忍名あふんきよあふとれなむ句  
 と服と起まの二格とい用あふんこし練と摺  
 と強く口こじさうはれい剣字いともつゝこ  
 の向ふ強りてふとねよ親おの親あんと一  
 の裏誦らとれこまりぬかくりあて七浦の草も  
 け服の練の摺も各句を時の奥へ穿てしこ  
 かくもささくねと服と書用のはさきあんと  
 授さるも服のははあんとらとれ今れは  
 あふぬととのけ文と筆ささくあふね  
 今れは知ふおと彼ふ池沼等此類もか

此れらの各目ともお月も一さうやおろし  
 と和考此公論あれいせ

○四季の名類此事

中右より四季の名実とお月むね嚏州とゆ  
 へ書け抄に用はれともお月くと家くの書用  
 して通用あふぬお月とされい禁中の行事  
 へり四季の名を論し神社御園の行法も  
 事本も歎の名類も先ん嚏州よりまよ  
 ちられとも嚏州を例し池沼の用らるる連寄

の附合と濫としていひつけらるるもの用とある  
 物名もあまこふれい今北能清は用をなく物と  
 時代の用捨りやうとてまゝしやせしめつけを  
 古今の論ある物とあけて今稱のることを加へ  
 し也稱くくを我りよる事達の人ありてけり  
 名れと凡例とありし月えりより十二月廿四日  
 まく彼り不嚏竹と用たりて事細め亦同じ  
 あくもやとせしめつけ式の制をみるふと或は  
 とも秋冬とて二季の向はやうきくする地は多き  
 とありしやまを加へておれと今式の加減と

い或は鉢裏と江池といひ長草と服類といひ  
 おとたれと今式の備りといひ或は新舊遠  
 秋とありて花は時季とまゝとあるハおれと今式  
 の貴賤といひ或は古おのり用とけり今式の  
 有用とあるおれと今式の常用といひ今式を  
 新故のきくといひして例の古式とわくといひて  
 くれと温故知新とやりよまゝはらくといひ  
 連するの両式より兼載京祇の控はゆるや  
 して紹巴の又百ヶ條ありて常言とあり先  
 事やをばくといひて同じ事ふおれかかん

二千系一斬の解ありて一即一戸通の爲と云ふ  
何の爲と云ふは、あらん何の向まき或る何んまを  
一部の凡例と云ふも、世に子てんまの跡と  
とあつて能く例の事話ちりりて、  
の衆議と云ふは、世に人の衆議の中、  
も、く此用と云ふも、

○春之部

此節

此名ハ佳節ノ御食礼ナリト云フ月ノ初節  
ヨリ節事ハ節人ハ節食ノ子ノ田各ハ俗習

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禱言自衣ノ威儀ヲ止テ  
臨時ノ遊ヲ云ヘリトワ或ハ朝拜ト云フ詞ヲ  
人ハ節ノ詞ト成ル等ノ俗習ヲモ知ナリ本  
ヨリ俳諧ノ世法ナリ諸國ノ俗談ヲ知悉ス

終雪

此名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云フ中昔ハ  
冬ト云ヘリ○今接スニ終雪ハ冬ニ用キ所以  
ナリ雪ノ班ナリ形容ハ初雪ト云フ薄雪ト云フ  
春ノ雪ノ平白ナラシモ日影ニ散リテ薄雪ト云フ  
寒氣ノ終和ナリ故ナリ終雪ハ決シテ春日ト定ミ  
此等ハ例ノ加減ハ例ノ當用ト云フナリ

雪解

廿詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪  
消テ氏消カル氏朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ湯モ  
結タラニ頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合  
ノ言ト成ル時アラシク夏ニ解ルラ春ト成シ消ルラ  
冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ヘ解ル我ト解  
ル故ニ冬春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ  
得テ此等ヲ當用ノ働トヤ云ハシ去ト冬ノ部  
ニハ斯ルニ及ハス

陽冬

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アレト  
燃ルト詞ヲ添ヘス氏決シテ春ト定キナリ鯨魚

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻蛉ノ説ハ節子ノ  
沙汰ニヤ○今持スル物ノ散回ハ毬羽目ノニ字ヲ用  
テ同訓別用ト成スキナリ毬羽ハ木陰ノ毬羽ヲ伝  
習ハフヒノ田各語ナリ或ハ耻羽目ト云フ類ナリ然レ  
ハ散回モ群尽モ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用  
トハ此等ノ為ナリ或ハ在子ノ野馬遊奔ヲ引テ  
遊奔モ陽冬モ同意ノ説アレト漢語ノ遊奔ハ倭  
語ノ用ニ非ス増テ野馬ヲ以テ野馬ノ説ハ何ノ俗習  
ニヤ論スルニ足ラス或ハ舟遊トハ湯桶訓ニテ和訓  
モ例ノ覺束ナク糸遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ

古今抄卷三

下



若葉

古式ニ木ノ若葉ハ春夏ト成シ冬ノ若葉ハ春ト成シ  
 成シ青葉ハ總テ新ト成セルカナリ然レテ或抄  
 ニ花ト若葉ノ二取ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ  
 夏氏云ル何故ニ決テ又ヤ○今按スルニ月花ハ凡雅ニ  
 一巻ノ飾ナレハ踏タレ物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配一  
 ハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ夏ト定レ○猶按スルニ  
 世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ヨリ秋ナラ  
 其子葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ夏ト成セルヨリ  
 若葉ノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春夏ニ  
 跨テ花ニ郭ムラ結タルトハ入道ノ御テ世等

ラ加減ノ機ニ夏トハ云キナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レハ残字ハ其季ヨリ  
 世季ニ残字ハ残ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ  
 春ニ決シテ残ハ夏ト定レ物惣シテ残葉残葉  
 ノ類モ古式ハ一様ナラ又故ニ叶ハ十色ニ實ニ兼テ  
 百世ニ論ノ断ル時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残ル  
 氏残葉ハ何ニ残ルキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ  
 取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬之部ニ奉ルニ  
 世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成  
 し歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中古ニ誹諧ノ加減

牡丹杜若

古今抄卷三

世

ヨリニ名ヲ其ニ用スルニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤木ノ又ヤ山館

ノ白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ吳ハ決シテ夏ト定ムルニ去レト落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ譬ニ桐葉ノ重ク落テ彼ハ散ル姿ニ非ス多シ安情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ多シ明ナルニ

水芙蓉

此名ハ新撰ナリ夏芙蓉ハ和漢任ニ秋ノ節ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ傳ニ和ケテ水芙蓉ト續ク任ニ芙蓉ト水

ヲ結スル散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物トナリ此類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ任ニ老萱トハ本ニリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱任乱萱任總テ暮春ノ物トレト例ニ今式ハ加減ニリ殊萱ハ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成テハ萱ニ老ノ感情アリ凡雅ハ例ノ淋敷味ト云ヒ此名ハ夏ノ據ニナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按ズルニ萱附子ハ春ノ草立テ夏ノ詞ハ六月ノ間ニモヲ見テ冬



至ノ比ニ鳴習フ故ニ管字子ニ鳴字ヲ結テ冬季  
ト成セリナリ然レ甘夏ハ向習ニテ或ハ引字ノ  
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ替古ハ甘夏  
ノ向ナレハ附子ハ決シテ甘夏ト云イ笛ヲ結テモ甘夏ト  
知レ月星日ナリト引声ヲ取上ノ管下セリ

鳥巢

鳥巢ニ鶏ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬ナレト  
此ニ鳥ハ歌道ノ秘也ナレハ冬ニ記サスト書捨テ  
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今接スルニ都鳥ハ  
指テ俳諧ノ用ニ非ス増テ秘也ナレハ論ニ及ハズ  
ト云テ鷲ト云レハ本ナリ水鳥ノ用ニ非ス鳥巢ヲ結テハ

夏ト決スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セ  
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ撮メハ水ノ増減浮沈テ四季  
モ其候ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新ト成セト鳥  
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ甘夏ナレハ  
浮巢ハ決シテ夏ト定キヤ巢ニ用ナキハ向作ニ  
依ルレ鳥ノ別名ハ冬々部ニ論アリ

翡翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト夏ノ谷  
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ夏後ト云シ川鱒ト倭名ナリ

沖鱒

此名ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊  
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ各用

ニテ此等ヲ例ノ者莫能ト云キナリ

反

此ニ只ハ京家ノ式目ニ多ハ秋ノ季ト成セルハ  
案スルニ此ノ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ此等ハ夏ト決ス  
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ妙ヲ論スレテ文字  
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋之部

花白田

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ花牙段屋スル種  
ノ理屈アルト此分ニテ四百方能ナト云ヘリ如何ナリ

秘古ニヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花白田モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ

仰向<sup>ウラム</sup>キ富トハ俯向<sup>ウラム</sup>ク多ク能證ノ次ナト云テ種々

ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス此等ヲ今式ノ有用ト知

桂花

此名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春季ノ説モアルト  
地下ノ桂ハ花ノ用ナリ和歌ニモ月光ヲ讀タル

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ

四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ

有明<sup>イナヨヒ</sup>既望<sup>イナヨヒ</sup>ノ名ニ例シテ月モ星モ二句去ク植物

ニモ二句去キナリ

鳥雀橋

古抄ニ生類ニ非スト、如何鳥ニ三句去キリ、鳩吹カツヤル此詞ハ種々ノ説アリト

紅葉散

此詞ハ古式ヨリ且散カツヤルヲ秋ト云イ散トハカリヲ冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若ナリ増テ

冬散ルハ木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散

此柏ハ鳥傘ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文止

秋ト定ヘキナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正詁ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ此類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從ヲ

因凡ノ故実ハ云一リ去ナカラ爾新ノ註ニ榧有テ美

實ニ而如栢トアレハ倭ニ榧テハ榧字ヲモ用ズ榧ト

栢トハ異字同訓ト云レシ或ハ鳥傘ノ説ニ紅葉セ

故ニト云レト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季

ナリ物ニシテ我家ノ貞名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正誤ノ二様モ能證ハ例ノ俗目ニ

從テ今日ノ用ヲ違スヘキナリ

椎榎栢

御筆ノ椎下ニ紅葉セ又木ナレ氏推トカリモ秋  
ナリ或ハ葉モ木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細  
ヲ察セス然レハ栢ト入遠テ彼ヲ辨トシ是ヲ秋ト志  
百世ノ惑心トハ世謂ナリ○今按スル椎モ榎モ栢葉ノ  
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ  
實ヲ結テ秋ナルヲ運實ヲモ甘辛リト云レハ古抄ハ  
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

他式ハ例ノ貴散ナリ奈何トナレハ新ハ冬ニ  
テ食フハ秋ナレ前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ  
茶ヲ摘ムハ春ニテ新茶ハ頂次ニ甘夏ト成セハ速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誡モ其時其物  
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好ホレトフ

初鴨

他名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散氏加減トモ云ハ  
○今按スル奉膳式ニモ「鴨ト並ナカラ貴スル  
所ハ秋冬ノ一差別ナリ去氏見向ノ姿情ヲ論ハ初  
ト云ハハ雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハハ味ヲ思フ多ク天取  
天耳に云ヘリ譬言ハ初ト音ニ鴨に味ヲ先ニ思フヤ  
鴨ノ冬ナルハ勿論ニ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

他式ハ禁中ノ行事ニ古式ニ他類ハ教多ナレト多ハ  
連歌ノ用ニテ他語ノ平語ニ並用ナラシ然レ他語

ハ下学上達ノ道ナレバ冬ニハ等ノ一ノ名ヲ奉テ公ニ承  
殿上ノ礼例ト成サハ四季ニハ類ノ名ヲ奉テ作諸  
曲節ニ用コトナリ去ハ野宮ハ漢ノ賀茂トニ在リテ  
伊勢ノ齋宮ニ移リ五ツヲ野宮ノ別ト云ハク去ハ  
羅旅ニモ哀傷ニモ非ズ増テ意無常ニモ非テ哀  
ナル所モ多クハナリ

○冬ノ部

枯尾花

此名ハ古今ニ論リテ秋ニ云イヌヘト枯尾花  
結テ冬ト定シ其故ハ名ノ枯ルヲ冬ト成シ

名ノ本ノ散ルヲ秋ト成セル散ルハ色アリテ枯ルハ色ナキ  
故ナリ然レバ名ノ草モ其例ニシテ枯尾花ハ決シテ冬

残葉

此亦ハ諸抄ニ論アリテ佛舎ニ重陽ニ残リテ秋  
ナリト云フ桃モ草モ其類ニ非ズ然レテ和歌

ノ公亦ニ十月五日ヲ以テ残葉ノ宮ト云レハ宮中ノ字  
ニ及ハスレテ決シテ冬ト定シ此等ヲ加減ノ用ト云  
ハシ残葉ハ總テ残花ノ例ニ效シ

作鷲

此亦ハ全ク當用ナリ古抄ニ秋ニシテ渡鳥ノ部  
ニ入タレト山雀日雀ノ類ニ非ラテ作鷲ノミ

物ニ連テス民家ノ軒ニ馴テ馬防ヲ傳ヒ水棚ニ

遊ユ之シ声ノ清ク久ルハ殊ニ寒シ増テ春ノ歸ル汝女  
モ見子ハ決シテ冬ト定シハ等テ姿情ノ例ト云シ

木兔

木兔ミツツモ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レト後鳥  
ニモ非ス名色鳥ニモ非ス増テ鳴声ノ物建ハ冥クサラ厩イ  
一ニ故ニトヤ然ラハ二季ノ加減ト云イ夜ノ鳴ク鳥ノ畜用ト  
云イ決シテ冬ト定シ或ハ鳥ノ部類ナカラ執ト成セル  
ニ用アリテ世等ハ古抄ノ文覺ト称スレ

鴉

此鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入ル  
ト其名モ其言ノ朝霜ノ氣色ト云イ秋ニ小鳥  
ノ多クレハ冬ノ部ニ跨リテ世名モ加減ト云キナリ

鳥

此鳥モ論セハ新撰ナリ御筆ハ鴉下鳥ト都鳥トラ  
加テ新式ニ新ト云レ歌道ノ秘言ナリト書格テ例ニ  
其故ヲ曉サ子ハ今日ノ用ニ立難レ○今ハ梅スルニ路鳥モ鴉  
モ水ニ甘夏冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ新トモ云ハケ  
シト鳥ハ鳴声モ寒ノ氣ニテ俗語ニ搔井氏云フナレ  
ハ能諸ニ各目ノ自在ヲ称シテ冬ニ用アラハ冬ニ  
用キヤ然ラハ路鳥ノ部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ  
季子ト成リテ附合ノ畜用ト云キナリ

鶯子

此名ハ古抄ニ歸子ヲ結テ冬ト成セレトモ  
鶯子トハ各目モ長ケレハ啼子ナクレ冬ト定

レ彼ハ冬至ノ此ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ノ用  
 ハナリ増テ尊ノ母鳴ト云ハ子ノ子モ及向敷  
 世名ハ俗習ヨリ鴨ハ性未ノ道ヲ定テ山ノ尾  
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨  
 ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云レ

尾越鴨

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ  
 總テ冬ナリト云レト去レハ附合ノ旨アラシ綿  
 ハ本ヨリ新ニシテ綿入ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ  
 冬ト定レ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云イ  
 棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ  
 非スト云イ綿ニ海風腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透  
 ナレハ論ニ及ハス然レラ綿ト木棉トハ附テモ昔  
 カラスト云テ蠶綿ト木棉トノ叙文アレト綿ト棉  
 トハ莫堅切ニテ音訓ニ替日ラヌヲ何故ニ附向ラ  
 嫌ヌヤ古抄ニハ世類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ  
 多ニ世綿ノ一名ヲ奉テ一方法ノ凡例ト成サハ其外ハ  
 推レテ知レキ古又ナリ

山路塔

世名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山山路ニ  
 宛ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事タレハ頓

テ大和ノ故宮ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ花路塔  
モ花路花モ同ク春ニ用テト也名ハ例ノ高見歌  
村脩ノ雪ニ結トモ花路塔ハ冬ト定レ然ツトモ  
花路花ハ漢ニ西夏語カ春白雪ノ詩ヨリ春ト云ハシ  
モ宣ナレト其名ハ指テ他語ノ用ナシ花路花ハ祖  
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜 也名ハ他語ノ自在ニシテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ  
カモフリト訓ニ喚テ中古ハ總テ秋禾子ト成セ  
去レト幸ニ冬ノ一子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ  
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定レナリ

雪海

也名ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリ也物ハ  
北越ノ名産ニシテ海邊ノ山石間ニ降積ス  
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海苔ト成レリ  
トフ然レニ雪ヨリト訓セシハ白ヲ青ト云レテ訓  
ナラン〇今ハ按スニ海苔ノ名ハ春甘夏ト復タレハ  
雪海苔ト云テ冬ト成サハ例ノ変誤ニ及ハスレテ  
也等ヲ加減ノ當用ト云レシ

大根引

也詞ハ冬ノ畜用ナリ大根ト略シテ音語ニ  
讀レシ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛房  
モ同シ名數ナカラ引ト云スレテ堀ト云フ其名



ハ秋ト知キナリ。○今按スルニ作謬ノ式同ハ新式ニ據  
ラス古抄ヲ通ス今ヲ日ノ世法ニ遠子ハ其ハ座ニ儘  
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己  
ノ理ヲ出ラシメサシハ其ハ所ヲ一世ノ血氣議ト知り  
其所ヲ百世ノ明監ト知キナリ

車ヲ云ケテ式の詭用と始メ節の食の公式より  
終メ大根の條習オクオノ世ノ四十余條あり  
て或ハ連系の有用あり 訛謬の可成り  
一或ハ古今の遠同と云フり或ハ季の節の  
加減と云フる年竟にけ式と云フ千式

万法の凡例きんをききんを備秘旨の微中  
を失フと一筆万通の機変よりけ式の序詞  
よりなる遠達の人と云フていへて委一く四季の  
名れとありんを 訛謬の誤不誤も作謬の  
用サシ用ヒキキを格別とて自己のるを  
といふきんより百世の惑をさるる

○ 作謬ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣としてしを定承の物教  
して作しんを家法ありしとやと書ハ紹巴の

字があるより一文字の比北板りありとせざるを  
 せくしつひきねて或とぬ実とふかありて志お  
 とまどとせしとき擬字とまをぬしちの假名  
 あるより一庵字中し類字も音をとねれい訓  
 ちの字やまをれし何故に撥れいちのみませ告  
 ちらや字書しふまどとせしかやとせしありあ月と  
 歌書の抄教高より一例の及り印あるぬ実  
 とも或とに併しとふかありてきとくへあす  
 ともあしふのこまき法とつひ法とつひハオハ  
 たり通音より一入書しとまをぬしふの字あれい

あかとしとふ。あしとせしとせしとあす。物のは  
 てもあしとせしと訓めやうまをぬしとあす。北  
 とせしとき假名の剛柔とまをぬしとせしと  
 へふの軽重よりとせしと併しといふあり一  
 假名遣の平竟と書法の字形と音韻の軽重  
 とけしと用しとせしと併しといふあり一  
 但し假名の軽重とせしと併しと白。園と野  
 重と黒。角と踏。二様と平。仄の相紋也。今接  
 ちらに假名の書法の連能のきりありて連音  
 ハ假名からに能階と真名からあれハ假名と

古今抄卷三

三三

直名と此配とを辨るにふのちある一とを  
あつらふとせしむる假名はせしむる假名を  
とらると假名書の手文をみるやしく書法  
の字假名くけぬれはあはれとせしむる  
をくるとせしむるはけりや一とをみる例の  
あるは似たりとせしむる假名はせしむる  
の口授とせしむるや或は文句とせしむる  
ち一とみるやよと信<sup>ノヒ</sup>とみるや或は言語と  
てとみるやよと信<sup>チノヒ</sup>とみるや或は  
の信<sup>ノヒ</sup>とみるやよと信<sup>チノヒ</sup>とみるや或は

字假のくるとを考一と信<sup>ノヒ</sup>とみるや或は  
に同訓異用の假名遣ありと上より判し申し  
下より判し申しお月むね假名遣のちある  
いひぬいねとかはえつちのちありて  
新制のちあるや一と假名遣のちあるの  
と古法のちあるや一と假名遣のちある  
の假名遣のちあるや一と假名遣のちある  
と古法のちあるや一と假名遣のちある  
例の明<sup>ノヒ</sup>とみるやよと信<sup>チノヒ</sup>とみるや或は  
とてみるやよと信<sup>ノヒ</sup>とみるや或は

古今和歌三

三

い い い  
い き く  
い ぶ い

鯛鯉類  
アサヒ  
アサヒ

る 監 きりあるの器の時也 紅 くまふみ  
或ハハ 又ハ

い 住 いすま 侍 しやく みる みる  
いすま しやく みる

い 眠 いみ 侍 しやく みる みる  
いみ しやく みる

い 此 こゝ 侍 しやく みる みる  
こゝ しやく みる

い 音 ね 侍 しやく みる みる  
ね しやく みる

い 東 あづま 侍 しやく みる みる  
あづま しやく みる

い ぶ い

よ通ひとびとふよ通ふおなせとれと  
音通といふへを底の二音よ通へといま  
くと喉牙の二音よ通ひ或はと喉を  
とよと齒音の二通をへへキと千の様  
音をちとカキクケの音とし定まら  
これと大和の国曲とて此字とらぬ  
きの助音おひとれい我おの音律  
此字とをきとひ通まらぬ折号とあれを  
和訓とくもとを取とらふ一△角撥とら  
にづいといくめとく鯛とや此差ふ

古今抄

三十四

と子やを假名も又向と言語とに動く  
 動くぬ款ありて物名をよき命を動ぬ  
 へ鯛鯉のれとついの字やまうへに美難の  
 おしおあく物名あれとも假名もるを  
 次子ちとつはありて美をあらわす  
 一まをあらまう日とをあらわす  
 辰吉の次子ちあり難のいふふの假名  
 あれといひを音等の次子ちあり但し  
 次子とて歌書よしと難いとおとるれ也  
 みのあをち初し中るとあれしおあふ

れとおつめつやとつん假名よ動く  
 動くねとけおま教ふあれと言語と動き  
 又向とあゆとまきとつんあふとあふ  
 のこまもも命しけ例よまるとも也次も  
 下の五品に古書の假名はつひに散れ  
 へ今後まるとなまると痛撰とらるに假名  
 はつひとおよそ又向と言語とに或は動く  
 と動くねと或は書ると音くねと或は  
 上中下よ用ると或は押重と多心後と  
 或は口借と故実と也まれの假名はつひ

蘇林抄

三十一

の事竟と和歌の撰集と武家の軍書  
七假名と直名と此をとりとり假名  
はくまをオとしてよあるを其書の用  
あれいよ一ゆるしと書やまかかんるあり  
まろりと今此は物ありと万葉假名を  
かそくくうひらくまはく直名と有りぬ  
又一子う二子よとこいぬれいあそえのる程  
とまふ海一河瀬を吹声の感作をれ  
い人よきふわう一河瀬とあふれとけと  
されと能書の家よされと一河瀬

○ ○  
○ ○  
の河瀬よりあつたおのうへいよあなる河  
流その好悪を撰集しつるしくその書  
此に流を流風といふるまなぬ也洋とけ武  
の河瀬なる圓角の二紋は轉重とま  
むれい千文万字と其例はあまうかよひやと  
せくよひあふねともおのうへ多岐の  
まといあんとたれい角撰の要とよ假名  
いよあれと用らうよ一發百中の的語と  
○ 通とあ。 精とあ。  
と 直とあ。 蛇とあ。 世とあ。

古今抄卷三

東蒼云けこよと序詞ありて格なま  
 さまをうたひの源なるよしはれしをね  
 しまのよおるしはるいひのよま  
 のいひくはむまのよまのよま  
 としちしてるねまのよまのよま  
 けりとも他おむ下の五よまのよま  
 男おこ下はあうー 痛お 大お尾お  
 女とんお山下はあうー 小痛おとけと緒と  
 東蒼云けこよの書流ありて奥のねこよの  
 としよけのるを書るし書ねとれ急緩の

○ ○  
とれ

差ふいゆ多作し東洛は詔のちりんありて  
 誰れいよまてありしころも也田舎のよま  
 一寄飛一とけと通用也

○ わ かし 男 上と下に用ゆ けれ又自也  
 ○ は かし 男 中と下に用ゆ 之輪 みまし

東蒼云△再撰もろた徹なるのらるる  
 かしと上下の用ひを。いと中下と用ひ  
 法とさる。お海むねとさる。むらきとさる。よ  
 字の上下と用ひとさる。かのよまと下と用ひ  
 かしとさる。みましとみまのねせは。のま

と申すに用ゆる。その字の中にも用い  
 らるゝあり。れとあら。れのおもあられ  
 とと申す。て書きたり。けお。持た。て  
 とも申す。て申す。はら。る。のれ。も。ま。を。て  
 つ。の。字。と。用。ゆ。へ。一。申。と。ん。て。申。す。ま。あ  
 おも。ん。ま。申。す。た。と。と。字。形。と。う。一。お。れ  
 と書きたり。て申す。と。一。假。名。の。ほ。く。ま。も  
 子。あ。れ。い。け。お。と。け。例。よ。あ。一。は。れ。も  
 ち。の。假。名。は。い。い。と。て。申。す。は。た。さ。一。申。す。あ。は  
 録。と。の。れ。と。い。う。ち。の。あ。と。も。知。く。一。申。す

- え
- へ
- 互

と申す。て申す。あ。れ。例。の。假。名。一。り。の。一。也  
 消キズル 杖ツエ 観ミ 木キ 小コ 枝エ の。ま。り  
 更カヘル 差サ へ。の。業ノ と。く。和ワ ぬ。実ミ 也  
 声コエ 猶ナド 或シ 本ホ 業ノ 八ハ 十ジュウ 也  
 東。を。え。え。の。字。と。む。一。り。論。あり。て。は。の  
 と。や。分。め。あ。り。て。申。す。と。も。論。え。と。も。衣モノ 也  
 と。も。い。や。申。す。と。も。ゆ。り。え。る。と。申。す。あ。り。て  
 二。音。通。ふ。る。也。結。え。と。と。ん。て。申。す。の。字。形  
 と。い。ひ。お。え。と。も。と。字。此。訓。也。或。い。お。え  
 と。い。ふ。名。あ。れ。と。も。と。申。す。て。實。字。あ。ん





運ニ云セシ假名はくひと云ふありて古名  
はくひと云ふはくひと云ふ新制あり  
はくひと云ふはくひと云ふ大和詞  
助語とやうけて能讀の文章此亦此條  
ふと云ふきり▲之扱まるけい濫觴を和子庵  
の遺稿より有りて彼より五秘の二子色む  
え祿甲成の秘もや伊賀北西蘇庵より有りて  
後撰集の撰集の序に「其まのたのた  
稿と云ふく有りて十卷篇の註換ありて  
前撰集の真名文より幻住庵記よりあり

鬼三楚の文論ありて略云我が国に能讀  
の文章と和歌連音とありて家と格  
ありと云ふは漢と四六の文にありて拍子  
の体と情秘ありと云ふは能讀の平話あり  
例の古名からありと云ふは「の比野也  
形容と上と能讀の羽の如く下と錯綜の腹  
と云ふは和歌もありと云ふは連音もあり  
と云ふは「新抄の源氏袂衣の體あり詞と  
似し似きん云々れとも今此文論より真名台と  
返り返りぬの差ふあれいきと云ふは「

ありとも假名とてし真名とるるなりといふあり  
大和の文しつらむ今論まる幻佳庵の記し古語  
の詞とかりあつし係文の起字はるわらふ思ひ  
吳楚東南入ちしとてしすれ用の用とははきし  
云思思楚北にさしらす常の事練の指とさしと  
しはきしとてしとてし子而ふ思とてし早計の  
人北悔あしんびや團のおるををの物とて  
人をさしとてしとてし蹟とてしとてし事あるあり  
今うし假名真名めをとりしとてしおらさておる  
とてし葉の假名かりしとてし今うしとてし我しとてし

かきしとてしとてしけおりの事とてし梓とてしとてし  
あつとてし難波のつとてしゆとてしとてし點換とてしとてし  
とてし我の文とてしとてし論とてし湖南とてし月とてし  
とてしとてし百世の文格とてし耻とてしとてし  
とてしとてし遺稿の大任とてしとてしとてし又和の  
秘訓とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし  
年とてしとてし月とてし祖とてしとてしとてしとてしとてし  
とてしとてし武陵とてしとてしとてしとてしとてしとてし  
の點換とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし  
とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてし

104

105



